

特集「子宮頸がん診療における最新の話題」

巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科
女性生涯医科学

岩 破 一 博

我が国の少子化は、現在由々しき状況に陥っている。平成25年版少子化社会対策白書によると、平成23年の合計特殊出生率は1.39で、30～40年後の我が国の総人口の試算は1億人を下回ると予想されている。さらに女性のライフコースの選択が年々多様になり、晩婚化・晩産化という社会状況が少子化に拍車をかけている。子宮頸がんは、その罹患数が生殖年齢にピークを来すという特徴を有した固形がんのひとつであり、女性の妊孕能を脅かす。人口の減少は国家の存亡に関わる大問題であり、本邦の社会状況を鑑みると子宮頸がんへの対応は急務と言える。

幸いながら、子宮頸がんの病因・予防・診断・治療において近年大きな変化がもたらされている。まずは、Harald zur Hausen博士によってヒトパピローマウイルス（HPV）感染が子宮頸がん発生の誘因であることが証明され、その予防や診断は様変わりしつつある。HPVに対するワクチンの開発は、子宮頸がんを予防可能な固形がんという位置づけにした。発がん性HPVの検出が子宮頸部病変の早期診断やリスクマネージメントに活用されている。また、George Nicholas Papanicolaou博士によって子宮がん細胞診が導入され、本邦においてもパパニコロ分類にもとづいた診断基準が子宮がん頸部細胞診に長年用いられてきたが、HPV感染・液状化検体などの新たな知見を取り入れた新診断基準ベセスダシステム2001に全面改定された。従来法に比して診断の精度や効率を上げることが期待されている。治療面においては、妊孕性温存を目指した子宮頸がん手術や抗がん剤治療が生み出され、がん患者におけるQOLのあり方

が問われている。子宮頸がんの根治と妊孕能を両立させることが出来れば、若年子宮頸がん患者にとっては福音となるであろう。近年画像診断の進歩は著しいが、放射線治療にそれを組み合わせた新たな治療手段が開発され、根治性を向上させるとともに有害事象を軽減すべく努力がなされている。放射線治療には、技術の進歩にあわせて発展する余地がまだまだ残されている。

そこで今回は、子宮頸がんにまつわる最新の話題として6つのテーマに絞り、それぞれを気鋭の著者に詳説いただくこととした。京都第二赤十字病院産婦人科部長の藤田宏行先生に「子宮頸がんとその疫学」について、他の固形がんとは異なる特徴を持つことやHPVや喫煙との関係が強いことなどを解説していただき、読者の理解を深める導入部とした。本学大学院医学研究科女性生涯医科学助教の森泰輔先生には「子宮頸がん検診の進歩」というテーマで、液状化検体やHPV検査の導入、ベセスダシステム2001によって子宮頸がん検診がどの様に変わりつつあるのか解説していただいた。本学大学院医学研究科感染病態学教授の中屋隆明先生には「HPVの最新の話題」として、ウイルスタンパク質E6の立体構造解析とHPVのメタゲノム解析研究について話題を提供いただいた。「子宮頸部の病理：最新の話題」として川崎医科大学病理学2教授の森谷卓也先生には、ベセスダシステム2001導入後の現状と課題、HPV感染診断におけるコイロサイトーシスの普遍性、子宮頸部の胃型形質を有する腺系病変の話題など解説していただいた。本学大学院医学研究科女性生涯医科学学内講師の澤田守男先生には「子

宮頸がんにおける妊孕性温存治療」として、広汎子宮頸部摘出術の適応や課題、妊娠合併子宮頸がんなどを説明いただいている。本学大学院医学研究科放射線診断治療学の増井浩二先生には「子宮頸癌の放射線治療：二次元治療計画から三次元治療計画、そして画像誘導小線源治療へ」というテーマで、標準的な子宮頸がん根治

照射や同時化学放射線治療についての解説、さらには新たな画像誘導小線源治療についてご紹介いただいた。

本特集が、読者の皆さまの子宮頸がんに対する概念をアップデートする一助となれば幸いです。